論作文産出時の書き手の文章産出活動および産出文章の変化に関する検討(2)

崎濱秀行

(阪南大学経済学部)

キーワード: 論作文産出・文章産出活動の変化・産出文章の変化

A study of change in writing activity and text produced on essay writing

Hideyuki SAKIHAMA

(Faculty of Economics, HANNAN Univ.)

Key words: essay writing, change in writing activity, change in the text produced

目 的

本研究の目的は、論作文産出時における活動内容や産出文章にどのような変化が見られるかについて検討することである。特に、実施した論作文課題に対する採点結果および採点結果を受けての留意事項(チェックリスト)を提示することで、書き手の文章産出活動および産出文章に見られる変化について検討する。

崎濱(印刷中)では大学生を対象として論作文産出課題を行った。課題のうち、1回目の課題について JESS(石岡, 2003)による得点化を行い、修辞、論理構成、内容の3観点それぞれについて0~5の6段階で得点化した。そして、3観点の中では修辞的側面が最も得点が低くなった(3.5点)。これを受け、修辞的側面の採点観点に関わる事項をチェックリストとして書き手に示し、2回目課題においてはチェックリストに挙げられた事項に留意して文章を産出するように求めた。その結果、修辞得点は3.0点と、1回目と比べて0.5点の減少が見られたものの、自由記述質問紙の回答の分析で、書き手はチェックリストを意識しながら論作文課題に取り組もうとする方向をとっていた可能性を示唆した。

しかしながら、書き手の中にはチェックリスト提示後の論作文課題において、留意事項に関連する側面の得点に上昇が見られた書き手も存在した。そこで本研究では、崎濱(印刷中)では対象とされなかった、チェックリスト提示後の論作文課題において得点の上昇が見られた書き手の事例について検討を加える。

方 法

参加者 大阪府内の大学生1名(19歳)(以下、事例2と記述する)

材 料 (1)論作文課題 本研究は教職科目の一部を利用して行われ、論作文課題を計3回実施した。本研究ではそのうち2回分(2012年11月, 12月実施)を分析対象とした。なお、11月課題では学校教育の役割に関する論述を、12月課題では教師として生徒に向き合う上で大切なことに関する論述を行った(いずれも400~600字)。書き手の産出文章については JESS(石岡, 2003)による採点がなされ、修辞/論理構成/内容の3側面について、0~5の6段階で点数化を行った。

(2)文章産出時における留意点に関するチェックリスト(以下、チェックリストと記述) 11月実施の論作文課題の採点結果を踏まえ、12月課題実施の1週間前に、次回の論作文課題実施時に留意すべき事項について、チェックリストの形で書き手に示した。チェックリストには7項目が含まれるが、本研究では以下の5項目が使用された。これらの項目は、崎濱(2012c, 2012d)において使用された、文章産出方略重視度合いを測るための質問紙に記載されたものである。

1. 一文あたりの長さを短くする(修辞)
2. 文章どうしをうまくつなげる(論理構成)

5. できるだけ漢字を使う(修辞)
6. 意見の理由や意見が正しいことの根拠をくわしくのべる(論理構成)
7. 同じ内容のことを書く場合でもできるだけちがう言葉で言いかえる(修辞)

(3)文章産出活動に関する質問紙 論作文産出に係る活動について把握するため、文章産出活動に関する質問紙調査(以下、質問紙調査と記述)を実施した(2013年1月)。内容は、①文章を書く際に最も重視したこと、②重視した度合いの評定(1~5の5段階)、③評定の理由、④1回目と比べての課題の文章の書きやすさ(1~5の5段階)、⑤評定の理由、の5点である。④および⑤は12月課題について、①~③は11月・12月課題それぞれについて回答を求めた。

手続き 11月実施の論作文課題の採点結果を基に、12月課題実施1週間前、書き手にチェックリストを示した。その後、12月課題を実施した。また、2013年1月には質問紙調査を実施した。以上のデータがすべてそろった書き手は3名存在したが、本研究では、論作文課題の得点(チェックリストに示された側面に関わる得点)が1回目と比べて2回目で上昇した事例(事例2)をとりあげた。

結果と考察

11月課題によって得られた事例2の産出文章を JESS で採点した結果、修辞2.9点、論理構成1.2点、内容4.2点となった。この結果および JESS において採点時に得られたコメントを踏まえ、修辞3項目、論理構成2項目、計5項目を書き手に示し、2回目課題作成時に留意するように求めた。そして2回目課題を実施し、得られた文章を得点化したところ、修辞3.8点、論理構成3.8点となり、修辞では0.9点、論理構成では2.6点の上昇が見られた。

そこで、1回目課題と2回目課題間で文章産出活動上にどのような変化が生じていたのかを検討するため、質問紙調査の回答について検討した。その結果、文章産出活動に関する質問紙の④(1回目と比べての課題の文章の書きやすさ)において「4 ややそう思う」と答えており、理由として、自分の苦手なところを克服や注意しようと思ったという点を挙げた。また、質問紙の①において、1回目は字数制限を挙げていたのに対し、2回目は自分の意見を内容に盛り込むことを挙げていたことに加え、そのことについての評定値(質問②)が4となっていた。これらの点を踏まえると、事例2においては、課題に対する自分の意見を内容に盛り込みつつ、その過程で自身の苦手な点(チェックリスト中の項目)を文章産出の際に生かしていこうとしていることが考えられる。その結果として、チェックリスト中の5項目に関連する側面(修辞、論理構成)における得点の上昇が見られたものと考えられる。

ただし、本研究および崎濱(印刷中)は共に事例に関する検討を行ったにすぎないため、得られた結果を一般化するには今後、多くの書き手からのデータ収集が必要となろう。

*本研究は平成21年度~24年度科学研究費補助金(若手研究B 研究課題番号21730533)の補助を受けて行われました。